

# Eureka X

六年制通信 No.11 令和4年6月17日(金)号

## 比較しなければ失うこともない

前回、前々回とショウペンハウエルの話をしました。今回も続けます。少し辛抱して下さい。彼の著作では『読書について』が一般に広く読まれていると思います。しかし、私が学生の頃に受けた読書指導で、幸福論の分野に限ると、最も強く推薦されたのは『幸福について』(新潮文庫 うちの図書館にありますよ)でした。詳しく言うと必ず読みなさいと指導されたのはラッセルの『幸福論』、ヒルティの『幸福論』、アランの『幸福論』、そしてショウペンハウエルの『幸福について』でした。このうちアランの著作は「語録」のようなもので、どこから読んでも構わないショートショート短篇集のようなものです。ラッセルはサマセット・モームと並んで当時の入試英語の常連でしたから、つまりラッセルの英文を解釈させる問題が頻出していたので、本の内容より英語の方に気が行っていましたけど。立派な英文ですよ。今でもそう思います。ヒルティは『眠られぬ夜のために』の方が有名かもしれませんね。眠られぬ夜に手に取ってみるといいよ。きっと羊を数えるよりも早く眠れるから。

『幸福について』はショウペンハウエルがつけた表題ではありません。もともと哲学書として世に出したのではなく、彼の中心思想の余録のようなものとして書いた随想なのです。ですから、私たちにはむしろ読みやすいですね。同じようなことを非常に多くの例を出して書いているし、言及している昔の賢人の数も多いので飽きてくるかわかりませんが、初めの数十ページだけでも読んでみて下さい。

彼の主張は、人間の運勢に作用する根本規定は三つあるということです。

1. 人のあり方    2. 人の有するもの    3. 人の印象の与え方

1. 人のあり方とは、人品、人柄、人物、健康、気質、力、美、道徳的性格、知性など、あなたに備わった性質です。つまり、あなたはどんな人か、ということ。

2. 人の有するものとは、あらゆる意味での所有物。つまり、お金や車や家などのことです。財産です。今は富の価値は昔より上がっているように思います。

3. 人の印象の与え方とは、地位や名誉、名声のことです。

ショウペンハウエルは、このうち「人のあり方」が他の二つに比べ、というか比べ物にならないくらい大切だと力説しています。彼の言葉を紹介しましょう。「一個の人間の自己自身としてのあり方、たった一人になってもどこまでもつきまとい、誰からも与えられたり奪われたりすることのないものこそ、その人間のひよっとしたら所有するようになるかもしれない何ものよりも、まして他人の目に映じた自己のあり方などよりも、本人にとって本質的であることが明らかだからである」と書いてあり

ます。「与えられたり奪われたり」が2の「人の有するもの」で、「他人の目に映じた自己」が3の「人の印象の与え方」ですね。それらは、つまらんことだと言っているのです。2も3も彼は「相対的なものに過ぎない」と言っています。「人柄は運命に隷属したのではなく、したがってわれわれの手から奪い取られることがない。その意味で、他の二種の財宝が単に相対的な価値を持つに反して、人柄の持つ価値は絶対的な価値だということができる」と。

富も名誉も相対的なものだと、ショウペンハウエルはそう言います。勝海舟も名誉などくだらない、他人が決めることだからと言っています。「行蔵は我に存す、毀誉は他人の主張（ルビは振りません。読み方は自分で調べて下さい。意味は、何をするか何をしないかは自分で決める。私の行動を他人がとやかく言っても私は気にしない、ということ）」ですね。

相対的とは相手があって初めて価値が決まるということです。言い換えると、相手が変わると価値が変動するということです。私はこの通信で何度もこのことを言ってきました。他人と比べることのできるものは、数値化できることに過ぎないと。そこに本質的な価値などないわけです。よく、昨日の自分と今日の自分、今日の自分と明日の自分、その成長だけを見つめて…、と言いますよね。その成長の手ごたえは自分だけのもので、他人と比べるものではありません。自分だけの、絶対的な価値です。だからこそ、それだけが、自分が本当に信じられることですよ。

#### 今週のおすすめ

・桂 枝雀 『らくご DE 枝雀』 (ちくま文庫)

枝雀さんが亡くなってもう20年以上になりますか。この人の師匠が桂米朝で、演芸会初の文化勲章受章者です。米朝さんは滅びつつあった上方落語を復興させた功労者でもあり、言葉遣いや細かい仕草など全てに行き届いた名人芸で有名です。今から40年ほど前、京都の演芸ホールで米朝枝雀の親子会が度々催されて、私はその度に足を運んだのでした。落語好きの皆さんには羨ましがられております。

この本は落語の入門書として手ごろだと思い紹介します。笑いとは緊張の緩和であると枝雀さんは言います。また、落語のオチと言いますかサゲと言いますか、最後の言葉を枝雀さんは四つに分類しています。「どんでん」「謎解き」「へん」「合わせ」、250以上の噺をこの四つに分類した一覧表が巻末についています。興味を持った噺があれば、DVDやCD、あるいは本で聴くなり読むなりしてほしいと思います。

思い出した。かなり前ですがラジオでこんな話をしていました。投稿されたハガキを紹介していたのですが、その男の人は中学生の頃から落語が大好きで、同級生の女子にも一人落語好きがいたのだそう。意気投合してお互いを落語に出てくる裏長屋の夫婦のように「おい、おリツ（たぶん律子さんとおっしゃるのでしょうか）」「何だい、お前さん」とクラスで呼び合って遊んでいたんですって。きっと二人は浮いていたでしょうね。しかし、放送の最後に、それで、その子が今の私の妻です、と。これ、素敵な話だと思いませんか。私、確か運転中に聴いていたのですが、感動しましたよ。

BGMは Melody. の *Realize* でした…。